

『ひろしくんの本』

本書は自閉性障害を有する「ひろしくん」こと深見博氏を育ててきた母親による手記である。本書をもつとも特徴づけているのは、自閉症児の子育ての中で両親が体験した苦労話にあるというよりも、子どもとかわり合う中で母親の緻密な観察眼と、体験的に獲得した自閉症児を育てるうえで多くの知恵が随所にちりばめられていることにある。

筆者は、これまで深見博氏と直接的な療育のかかわり合いをもっていないが、個人的にかなり昔から存じ上げていた。会うたびに驚かされたのは、人間に対する深い愛と、生きることに対する純粋な喜びを常に全身で表していることであった。今の



中川書店、1999年
本体1400円

時代にあつて、平凡な日常生活の中で、生きることにこれほどまでに大きな喜びを日々体験している人はいらるであろうかと思えるほどである。

その秘密がどこにあるのか、本書を読むとまもなく明らかになつてくる。著者深見憲氏は子育ての中で、「学校生活で何かができるようにと学習のみに親である私が一生懸命になるのではなく、かわりだけを大切に念じ続けたこと」「博がことばで表現できる前に博の心の水面下をいかに満たしてあげるかを毎日続けてきたこと」「何事もスタートが肝心で、いかに博のハートをゆさぶることができるか、感動のある出会いを大切にできたこと」が幾度となく繰り返し述べられている。

子ども自身が心から何かをしたいという素朴な欲求を大切にし、人とかかわり合いを大切にするため、両親は常に心を砕いてきたことがわかる。このようにして生まれた

人との出会いを通して、「時に魂をゆさぶられて感動したり、よろこびや悲しみやくやしさを味わい、会いたい、話したい、この人と一緒にやりたい」という意欲や自発力が身についていった」ともいう。

子育てとは、過去に自分自身も親によつて育てられてきた者が、それまでに身につけてきたことば文化を子どもに伝承するという営みである。このような営みによつて、子どもは文化を身につけ、成長し、やがて親子の立場は逆転して子は親を看取るという関係へと変容していく。

このような関係の変容が、ひろしくんと両親とのあいだで見事に示されている。両親が熱い思いでひろしくんに語り聞かせてきたことばを、ひろしくんはいつの間にか、自分がまるで親になつたかのように、病床にあつて目の前の食べ物や早く食べたそうにしている父親を相手に「おとうさん、そろつていただから、もうちょっと我慢しなさい」と語り聞かせている。このようにひとつひとつのことばが、大切にされてきたかわり合いの中で、心動かされる体験とともに記憶され、関係の変容の中で再現されていく。子育てがけつし

て親からの一方的なかかわりではないことがわかる。

このような人とかかわり合いを大切にできたことと深く関係していると思われるが、ひろしくんの生き方に深く感動を覚えるのは、彼にたつての外界世界、対象世界が実に見えるという点である。そのことはけつして子ども時代のみならず、菓子工房へアルバイトで入社して日々作っているケーキやクッキーに対して抱く思いにも共通する世界である。筆者は彼の働いている姿を拝見したことがある。手作りのケーキやクッキーを前にして、まるで友達か仲間を相手にしているようにして、楽しそうに語りかけている姿を発見した。彼にとっては身の回りのものすべてが自分の分身であるかのような世界で生きているのではないかと想像されるのである。自閉症の人々の感性と職人魂とのあいだにはどこことなく共通したものを感じていた筆者にとつて、ひろしくんの物づくりに対する思いは、まさに職人魂そのものといつてよい。

このような繊細で鋭敏な知覚世界で生きているひろしくんであるた

め、今でも自閉症の人々に共通したつらさ、苦しみ、独特な楽しみも残っていることが、本書のもうひとつの特徴である緻密な行動記録を読んでいくと教えられる。たとえば、三歳六カ月の時に、「博さんほんんな時が一番幸せと感じますか」との医大生の質問に、「僕はくるくるまわっている時です」、ストレスがたまった時ほど「まわると脳がスッキリする」と即答したという。

本書は、これまでにシリーズで三冊出版されている。最初の書では、ひろしくんと家族との壮絶ともいえるほどの育ち合いの歴史、(II)では食生活の中でのかわり合い、(III)では日々の生活の中でのかわり合い、に焦点が当てられている。すべてに一貫しているのは、何事を身につけるにしろ、それは人とのかわり合いを大切にしていくなかで初めて可能になっていくということの子育てにおける信念である。自閉症児の子育てで苦労している親たちのためにも、自閉症児の理解を深めるためにも、本シリーズの続編を期待してやまない。

最後に、自閉症の療育に限らず、子育て一般に通じることであるが、

人が育つということの基盤にいかん人とのかわり合いが大切なものとして存在しているかを改めて教えられるとともに、自閉症の障害特徴としてこれまで語られてきた多くが、いかに育ちの過程でつくられていったものかを、われわれは改めて考え

ドナ・ウイリアムズ著 (河野万里子訳)

『自閉症だったわたしへ』

自閉症はその最初の記述から、質、量ともに膨大な研究が継続して行われてきた。しかしミレニアムを挟むこの一〇年間は、これまでとはまったく異なった自閉症研究のエポックとなった。一つは自閉症圏の障害が、障害という範疇を超えた広がりをもつスペクトラムを作っていることが明らかとなったことである。もう一つは、成人した自閉症者自身の自伝や伝記が出揃い、自閉症の体験世界が明らかにになったことである。ドナ・ウイリアムズによる自伝三部作は、後者の新たな展開に決定的な役割を果たした。

世界的なベストセラーになった

直すことも必要であるように思う。

小林隆児

(本書の購入をご希望の方は、出版社に直接お問い合わせください。千八二〇〇六三 福岡市東区原田二二〇九一〇二 中川書店 TEL/FAX 〇九二六二二八六七〇)

告された。一九八六年には最初の自伝であるテンブル・グランディンの『我、自閉症に生まれて』(学習研究社)が出版された。

これらの論文や自伝においても異なるその体験世界は語られていたが、ドナ・ウイリアムズの自伝において、決定的に異なる点があった。その第一は、幼児期の体験がこれまでのものに比べ格段に詳細に著されたことである。第二は、ドナ・ウイリアムズがこと自閉症という障害に関してほぼ未診断、未治療のまま、過敏性と特異な対人関係の障害に苦しめられつつ、普通の人として自立の道を探ってきたことである。

『自閉症だった私へ』の原題は *Nobody Nowhere* (どこにもいないだれでもない) である(写真は文庫版)。この本を最初に読んだときの衝撃は忘れられない。筆者にとつては「やはりそうだったのか」という深い感動であった。

自閉症に長年接している人間には、彼らの体験世界そのものがどうやら異なっているらしいことに気がかざるを得ない。自閉症者の回想は少しずつ明らかにされていた。一九七九年にはベンボラッドにより有名なジェリーの回想が論文として報告されて、一九八一年には最初の自閉症者の手記であるトニーの手記が報

告された。この本は二つの大きな役割をした。一つは先に述べた自閉症体験を広く知らしめたことである。もう一つは、こちらのほうが大きな功績であると筆者は考えているのであるが、世界のさまざまな地域でひっそりと生きてきた成人自閉症者に、みずからの本質的な問題が何かを教えたことである。この中には、診断を幼児期に受けたものもいれば、完全に未診断であったものも存在した。

この自伝の成功に勇気づけられた

●特集——自閉症(こも)に生きる

IV・自閉症の人々とともに育つ

子どもと母親の育ち合い

泣くようになった。三歳頃に数カ所の病院や相談所を受診した。

以上を経過を経て、筆者は外来で「寛太くん」親子にお会いした。これまでの「寛太くん」

泣くようになった。三歳頃に数カ所の病院や相談所を受診した。